

## 研究発表要旨

## (1) 不登校を示した通常学級在籍のASD児を受け持つ担任の理解を深める支援のあり方

川崎医療福祉大学大学院医療福祉学専攻修士課程 ○木崎 伸子  
川崎医療福祉大学医療福祉学科 諏訪 利明

## 【要旨】

不登校と発達障害は何らかの関わりがあると考えられ、発達障害を持つ不登校児の場合は、その子どもの障害特性に合わせた指導を行うことが必要である。しかし、通常学級の担任が、どのように発達障害を持つ不登校児の障害特性を学び、理解を深め、支援を行ってきたのかという研究は少ない。

本研究は、小学校通常学級に在籍し、不登校状態を示していたASD児の担任教員が、TEACCHアプローチを参考にした個別介入アプローチ及び個別介入後のフィードバックにおいて、①どのようにその児童のASDの特性理解を深めていったのかを明らかにし、②担任教員がASD児の障害特性を理解するための支援のあり方を検討することを目的とする。研究方法は、協力児のアセスメント及び個別介入を行い、そのフィードバックを担当教員に行う。また、個別介入前後に担任教員にインタビューを行

い、その発言内容を比較検討することとする。結果は、個別介入前のインタビューにおいて、担任教員は協力児のASDの特性について、「その子の世界がある」と漠然と発言するだけだったが、個別介入後のインタビューにおいて、協力児には「こだわりがある」「パニックがある」「大きな声が嫌い」など、ASDの特性について具体的に発言することができていた。考察では、担任教員の協力児のASDの特性についての発言の変化は、協力児のアセスメントの結果を具体的に数値により説明すること、また、個別介入での協力児の様子からASDの特性について事例を挙げて説明することにより、より深くASDの特性理解が進んだと考えられる。今後は、さらに、担任教員の発言について、フィードバックのどの場面で、どのようにしてASDの特性の理解を深めることができたのかを分析し、さらに詳しく考察を続ける。

## (2) ASDの特性理解に基づく学校コンサルテーションの在り方についての検討

ー TEACCH学校コンサルテーションを基にー

川崎医療福祉大学大学院医療福祉学専攻修士課程 ○岸本 和美  
川崎医療福祉大学医療福祉学科 諏訪 利明

## 【要旨】

文科省は「発達障害に関する専門的・実践的知識を有する教職員の育成」を重視している。TEACCH Autism Programでは、1972年から指導者へのトレーニングプログラムが実践されてきているが、そこではASDの障害特性に基づいた指導を教師が自立して実践できるようになることを重視しており、文科省の方針とも共通する。本研究では、TEACCH学校コンサルテーションモデルに従って実施したコンサルテーションが、教師の指導にどう影響し、それによって生徒の行動がどのように変化したかを明らかにすることにより、ASD特性に基づく学校コンサルテーションの在り方を検討することを目的とする。対象者は、中学校特別支援学級担任教師2名で、ASDの診断がある中1男児2名をそれぞれの協力児とした。コンサルテーションは、それぞれの教室における担任の指導実践を通して実施した。データの収集と分析方法は、コンサルテーション実施前、実施中、実施後に、対象者との話し合い

の内容を録音し、逐語録を作成した。このデータから、第I～Ⅲ段階でのコンサルテーションの内容と対象者の発言・取り組みの変化を抽出し、整理し、分析した。

結果としては、対象者は、協力児のASD特性から支援を工夫し実践し、協力児は主体的な行動が可能となった。さらに対象者は、他の生徒や介入場面以外でもその方法を応用し般化させることができた。考察として、ASDの指導におけるコンサルテーションの在り方としては、①ASDの特性理解を基にアセスメントを実施し、指導対象児のASD特性を適切に捉えられるようにすること②TEACCHの構造化した指導を指導対象児の実態に応じて使えるように、対象者の理解に応じて情報提供や助言を行うこと③実践についての評価をASD特性の解説を加えてフィードバックすることを繰り返すことがあげられ、継続的なプロセスが重要であることが明らかになった。

## (3) 病院における院内デザイナー配置に関する経営者の評価

川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科	○森 絵美
川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科	合田 喜賢
川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科	平野 聖
川崎医療福祉大学医療福祉デザイン学科	真鍋 克己
京都橘大学現代ビジネス学部都市環境デザイン学科	松本 正富

## 【要 旨】

本研究は院内デザイナーを配置する医療機関の経営責任者の評価から、院内デザイナー配置の有用性や意義を明らかにすることを目的とした。

院内デザイナーを配置する医療機関の経営責任者を対象に半構造化インタビューを実施し、M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を用いて分析した結果、8カテゴリーと24の概念が抽出された。

医療機関で働く院内デザイナーは、デザインスキルに加え1)【専門以外に必要な能力】として高いコミュニケーション能力が必須であること、少人数部

署への配属から2)【院内デザイナーの能力への付加価値】が求められること、3)【院内職員であることのメリット】があり4)【業務効率の向上】に良い影響をもたらしていること、その結果は、5)【医療機関内での肯定的認識】や6)【必要な職種であるという認識】につながっていること、7)【経営に資する働き】や8)【外部評価への貢献】に対して有益であることを明らかにした。

本研究結果より、院内デザイナーに対して経営者の否定的な評価は見られず、利用者と医療従事者の双方にとって有益に働く存在であることが確認できた。

## (4) 月経周期がH反射と筋力に及ぼす影響

川崎医療福祉大学大学院健康科学専攻博士後期課程	○村田めぐみ
川崎医療福祉大学健康体育学科	斎藤 辰哉
川崎医療福祉大学健康体育学科	小野寺 昇

## 【要 旨】

本研究は、筋力発揮に関与する脊髄の興奮性に着目し、月経周期に伴うH反射と筋力発揮について明らかにすることとした。対象者は、月経に伴う不定愁訴を月経中に最も強く自覚する成人女性4名であった。本研究は、川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した。測定項目は、右足ヒラメ筋H反射、握力および右足関節底屈時の最大筋力とした。H反射の解析項目はH波振幅とし、相対値で評価した。刺激強度は、最大M波振幅に対する20%とし、M波振幅が一定であった8回の振幅を解析した。握力は、右手2回の測定にて最大値を採用した。足関節底屈時の最大筋力は、自作の椅子に座り、膝関節および足関節の角度が90度になる位置にロードセルを取り付け、最大努力の足関節底屈を2回行い、最大値を採用した。1週間に1回の頻度で測定を行い、

月経中を基準とした1周期のデータを解析した。その結果、H波振幅が最も高値を示す期は、対象者で異なった。H波振幅が高値を示すことは、脊髄の興奮性が高いことを示唆し、筋力発揮の増加に関与するものと考えられる。月経周期に伴うH波振幅の増加に伴い、握力および最大筋力は増加した。しかしながら、3名の対象者において月経中から月経後への筋力発揮の変化は、H波振幅が減少したにも関わらず、握力および最大筋力が増加した。このことは、月経中の不定愁訴が減少、消失することによる影響であったものと推測する。女性の筋力発揮変動に関与するものとして、月経周期に伴う女性ホルモンの影響や心理的な影響が挙げられる。本研究において、月経周期に伴う筋力発揮は、脊髄の興奮性に加えて月経に関連する不定愁訴の強弱に関与する可能性が考えられた。

## (5) 富士登山が遅発性筋肉痛に及ぼす影響

川崎医療福祉大学大学院健康科学専攻博士後期課程 ○玉里祐太郎  
 川崎医療福祉大学大学院健康科学専攻博士後期課程 和田 拓真  
 川崎医療福祉大学大学院健康科学専攻博士後期課程 吉田 升  
 川崎医療福祉大学健康体育学科 小野寺 昇

## 【要 旨】

【目的】伸張性筋収縮は、下り歩行や歩行動作の減速時などの筋の収縮様式である。遅発性筋肉痛は、伸張性筋収縮により引き起こされる筋線維膜の損傷に起因する。遅発性筋肉痛は、身体的特性、トレーニング経験との関連性が報告されている。しかしながら、これらの関係性は必ずしも一定の知見が得られていない。本研究は、富士登山者における登山後の筋肉痛に影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的とした。【方法】調査対象者は、平成28年8月9日から15日の期間に富士山御殿場ルートで下山した登山者317名とした。回収数は93名(回収率：29.3%)であり、データ欠損の無い73名を解析に用いた。質問紙調査は、御殿場ルート新5合目にて実施した。質問紙の内容は、対象者特性および登山経験に関する質問7問、富士登山に関する質問7問、日常の運動習慣に関する質問3問とした。また、下山

後の筋肉痛に関する測定を実施した。筋肉痛の測定は、Visual analog scale を用いて、下山直後から下山168時間後まで経時的に行った。筋肉痛の測定紙は、郵送で回収した。【結果および考察】遅発性筋肉痛の最高値と登山歴、登山回数、登山頻度および1回当たりの運動時間は負の相関関係が認められた(それぞれ、 $p < 0.05$ )。登山後に出現する遅発性筋肉痛は、登山経験を積むこと、日常的に行う運動の時間を長く確保することで軽減される可能性が示唆された。遅発性筋肉痛を従属変数とした際の独立変数として、登山頻度および登山歴が抽出された(予測式：遅発性筋肉痛 =  $(-0.318 \times \text{登山頻度}) + (-0.634 \times \text{登山歴}) + 51.304$ , 決定係数：0.126)。登山頻度および登山歴は、登山後に出現する遅発性筋肉痛の程度を予測する有用な指標であると考えられる。【まとめ】登山頻度および登山歴は、登山後に出現する遅発性筋肉痛の予測因子となることが明らかになった。

## (6) 水中運動が尿量と尿意感に及ぼす影響

川崎医療福祉大学大学院健康科学専攻博士後期課程 ○和田 拓真  
 川崎医療福祉大学大学院健康科学専攻博士後期課程 玉里祐太郎  
 川崎医療福祉大学大学院健康科学専攻博士後期課程 吉田 升  
 川崎医療福祉大学健康体育学科 小野寺 昇

## 【要 旨】

【背景と目的】浸水時に生体は、水の物理的特性の影響を受け尿量と尿意感が増加する。本研究は、水中運動後の尿量および尿意感の関連性を明らかにすることとした。

【方法】被験者は、健康な成人女性6名であった。測定プロトコルは、陸上座位安静を30分間、続いて水中運動を30分間行った。退水後、30分間の回復期の測定を座位にて行った。水温は、30℃とした。水中運動の構成内容は、W-up (水を利用しながら全身の筋肉をほぐす運動)、Block1 (シンプルな動作を基本に反復回数や移動を用いた運動)、Block2 (シンプルなコンビネーションの中で、強度の調節がしやすい運動)、Block3 (アクアダンスの基本動作から格闘技を用いた運動) および Cool-down (身体を冷やさないように動きを止めずに、全身の筋肉をほぐす運動) から構成した。

実験1. 水中運動後における尿量と尿意感 (陸上と水中の比較)

【結果】運動後における水中条件の尿量は、陸上条件と比較して有意に高値を示した ( $p < 0.05$ )。運動後における水中条件の尿意感は、陸上条件と比較して有意に高値を示した ( $p < 0.05$ )。

実験2. 水中運動後における尿量と尿意感 (異なる水位の比較)

【結果】運動後および回復30分時における鎖骨位条件の尿量は、大転子位条件と比較して有意に高値を示した ( $p < 0.05$ )。運動後および回復30分時における鎖骨位条件の尿意感は、大転子位条件と比較して有意に高値を示した ( $p < 0.05$ )。

【考察】浸水時における尿量および尿意感の増加のメカニズムは、静脈還流量が関係する。静脈還流量は、水位が高くなれば増大し、水位が低くなれば減少する。これらのことから、静脈還流量の増加が、尿生成を亢進させ尿量および尿意感を増大させたもの示唆される。

【まとめ】水中運動後における尿量および尿意感は、水位 (水圧) の増加に依存し、増加する。

## (7) 片眼弱視における波長掃引型光干渉断層計を用いた黄斑部網膜厚および脈絡膜厚の検討

川崎医療福祉大学大学院感覚矯正学専攻修士課程 ○荒木 俊介  
川崎医療福祉大学感覚矯正学科 三木 淳司

## 【要 旨】

[背景] ヒトの弱視に対する研究方法は限られており、その病態はいまだに不明な部分が多い。近年、光干渉断層計 (OCT) の登場により眼組織の断面像を非侵襲的に高解像度で撮影することが可能となったが、弱視患者の網脈絡膜における形態的变化に関しては不明である。

[目的] 波長掃引型 OCT (SS-OCT) を用いて、片眼弱視患者の黄斑部網膜厚および脈絡膜厚を弱視眼、健眼、正常対照眼の間で比較した。

[対象および方法] 対象は46例の片眼弱視患者 [不同視弱視群31例 (6.9±3.8歳)、斜視弱視群15例 (7.9±4.2歳)] および眼疾患のない24例の健常者 (7.8±3.3歳) とした。網膜厚および脈絡膜厚は SS-OCT (DRI OCT-1 Atlantis<sup>®</sup>, TOPCON) により測定し、中心窩を中心とした直径 6 mm 範囲内を ETDRS マップを用いて解析した。網膜厚は黄斑部網膜神経線維層厚、神経節細胞層 + 内網状層 (GCL+IPL) 厚、

神経線維層 + 神経節細胞層 + 内網状層 (GCC) 厚、内境界膜から網膜色素上皮層までの ILM-RPE 厚に分けて検討した。網膜厚もしくは脈絡膜厚の比較には、眼軸長を共変量とした共分散分析を用いた。検定の有意水準は  $p=0.05$  とした。

[結果] 不同視弱視群では、弱視眼の GCL+IPL 厚、ILM-RPE 厚および脈絡膜厚が健眼および正常対照眼よりも有意に厚かった。斜視弱視群では各眼の網膜厚および脈絡膜厚に有意差がなかった。不同視弱視群について、弱視眼と健眼における視力差と網膜厚差または脈絡膜厚差の間にはいずれも有意な相関がなかった。

[結論] 不同視弱視でのみ弱視眼の網膜厚、脈絡膜厚が健眼、正常対照眼に比して厚かった。弱視の種類による厚みの差には視機能障害の程度の影響は少なく、弱視の発生機転の違いもしくは屈折異常の違いが影響していることが示唆された。